

の似姿)を知ること」(Ⅷ, vi, 9)とは、同根源的な事態なのである。しかし、我我は意志する力自体が弱められているために、上の本然の姿をそこにおいて見る場に還帰しえない。キリストの恩寵が神の似姿の回復のために不可欠とされるのは(Ⅷ, xi, 16)、この意味で、人間の自己知の両義的な構造そのものにおいてなのである。言い換えれば、自己の現にある姿を知ることが真理の光に照らされることなしには生じない限りで、我々は恩寵、恵みを与えられてはじめて正に人間なのだ、と言うべきであろう。

因みに、「永遠なるもの(真理)を志向し超出すればするほど、増々、神の似姿へと形成されてゆく」(Ⅷ, vii, 10)と言われるが、その内実としての「神を愛する」という信のかたち、すなわち人間は、存在論的に先なる自己の根拠を、その自己のかたちにおいて宿し、かつ表現していると考えられよう。そこにはただ、「真理の形相によって形成されうるが、しかし形成され切ってははいないもの」*formabile nondumque formatum* (ⅩⅦ, xv, 25)の嘆きと希望が秘められているのである。

意見

稲垣良典

カール・ラーナーは *Bemerkungen zum Dogmatischen Traktat <De Trinitate>* (*Schriften zur Theologie* N. 1960, S. 103—133)において、アウグスティヌスをはじめとして、西欧の神学的伝統においては救いの秘義 *Heilsmysterium* としての三位一体が、もっぱらその形式的側面(父、子、霊が三なる神ではなく、一なる神であるのはいかにしてか)において神学的思弁の対象となる傾向が見られた、とのべている。ラーナー自身は、神の内的生命の神学として展開される「内在的三位一体」*die immanente Trinität* と、救済史の観点から展開される「摂理的三位一体」*die <ökonomische> Trinität* とは一体でなければならぬ、との根本的立場をとる。

ラーナーの発言(とくにアウグスティヌスに関して)が批判にさらされていることは言うまでもない(参照、W. J. Hill, *The Three-Personed God. The Trinity as a Mystery of Salvation*, 1982, p. 55—56)。われわれとしては、アウグスティヌ

スの *De Trinitate* が「信仰の知解」*intellectus fidei* という神学の基本的立場によって貫かれていることを心にとめた上で、同様の立場から展開されたアンセルムス、サン・ヴィクトルのリカルドゥス、ギルベルトゥス・ポレタヌス、トマス・アクィナス、ボナヴェントゥラ……の三位一体神学との詳細な比較を通じて、アウグスティヌス的な神学的探求の特異性を明確にする必要があることを指摘しておきたい。たとえば、トマスがアウグスティヌスの三体一体論を「完成」した、といっても事態はあまり明らかにされたとはいえないであろう。いまここで、アウグスティヌスと比較した場合のトマスの三位一体論における神学的探究の特徴について詳しくのべることはできないが、三位一体についての探究をなぜ行うのか、という点について神的創造——愛による創造——について正しく考えるため、さらに——「これがより主要な理由であるが *principalius*」——人類の救済について正しく考えるために必要であった、と指摘していることに注目したい (*S. T.*, I, 32, 1, ad 3)。また唯一なる神について *De Deo Uno* 神学的な議論がなされる場合と、三一なる神について *De Deo Trino* の場合とでは、同じ神学的議論であっても重大な相違が見出されることも指摘している (*Ibid.* ad 2)。さらに、トマスの神学的探求の特徴を理解するためのよりどころとして、周知のテキストであるが *S. T.* I, 12 *Quomodo Deus a Nobis Cognoscatur*; 13 *De Nominibus Dei* を挙げておきたい。

私自身、アウグスティヌスの *De Trinitate* をここ数年、大学院の演習テキストとして用いてきたが、第十巻で指摘される、精神の精神自身にたいするもっとも親密な現存、第十四巻で語られる、常に自己を記憶し、知解し、愛する精神、などに関して、アウグスティヌスにおける自己認識についてはどのように考えたらいのか——とくにトマスが *De Veritate* 10, 8; *S. T.* I, 87において論じているところとの比較において——問題として抱えたまま今日に到っている。今回のシンポジウムにおいてもこの点についての解明を期待したのであるが、討論がアウグスティヌスとトマスという方向をとるまでには到らなかったのも、期待は満されなかった。

アウグスティヌスが問題にしている精神の自己認識は、トマスのいう「個別的な仕方による *particulariter*」認識ということで説明されるのか (*S. T.* I, 87, 1)。また、トマスが *De Veritate* 10, 8 においては言及し、*S. T.* においては沈黙している、精神が自己について有する *cognitio habitualis* と、アウグスティヌスが語る自己

認識との関係はどのように理解したらよいのか。さらに、より一般的に、トマスにおける *De Anima* 論と、アウグスティヌスが *mens* について論じているところとは、*anima* ないし *mens* に関する理論的、体系的考察として、相互にどのような関係に立つものなのか。B. J. Lonergan が *Verbum. Word and Idea in Aquinas* (1967) において行っている問題提起とも関連して、自己認識と（形而上学的な）靈魂論とのかかわり、という問題をめぐってアウグスティヌスとトマスとの関係をあきらかにする必要があるのではないか。この問題についてはすでに高橋亘教授の論文があるが（「自己認識に就いて——アウグスティヌスとトマス・アキナスの場合——」、『中世思想研究』XIX 1977）、今回のシンポジウムで二人の報告者によって、アウグスティヌス『三位一体論』における人間精神の自己理解の問題にたいする鋭い切りこみがなされたのを機会に、今後いっそう討論が重ねられることを期待している。

質問

泉 治 典

Ⅷ巻以降に見るイマゴ・デイに関する議論は『三位一体論』の中で最も興味深いものであるが、それもあくまで全体の中で意味づけられるべきであろう。イマゴ・デイが三位一体の解釈の場であるとはいかなることか。また *modo interiore* (Ⅷ, prooem. 1) とはいかなることか。

M. Schmausの論文 *Die Spannung von Metaphysik und Heilsgeschichte in der Trinitätslehre Augustins* (*Stud. Patr.* Ⅷ, 1962) は、アウグスティヌスの中に内在論と経緯論の緊張（かさなりとずれ）を見ている。これはすぐれた問題指摘であったが、「緊張」の指摘だけで終わっている。私はむしろ、ユスティヌスからテルトゥリアヌスに至る古いエコノミストへの訂正がここにあり、その「緊張」は構造的なものであったと考える。この点をこの書の構成にそくして考察してみよう。

この書は『告白』とならんで明瞭な構成をもっている。15巻の区分はこうである。I, II—IV, V—VII, VIII, IX—XI, XII—XIV, XV。すなわち、1・3・3・1・3・3・1で、Ⅷ巻を中心において集中構造ないしキアスムスをつくっている。I